

『責務』

出発直前。バート・カスタルは、「話がある」と、レイザ・インダーを洞窟側の岩場へと連れてきた。

「メリッサ・ガードナーのことだ。どういうことだ？ お前、彼女と心中するつもりじゃないだろうな」

「メリッサは連れて行く。この作戦の責任者は俺、俺がお前の上官だ。俺と彼女を置いて、お前達は素早く撤退しろ」

「俺は騎士として民を守る義務がある。立場的な理由だけではなく、俺本人の意志としてもだ。メリッサには深部までサポートしてもらうが、連れて帰る。誰であれ、民間人を置いて俺が帰還することは絶対にない。俺の存在が帰還の妨げになるというのなら、その場で自決してでも行かせる、それが騎士としての在り方だ」

民を犠牲に生き長らえたのならば、命は助かってもバートは社会的な死を迎える。それはこの作戦を指揮する立場にあるレイザとて同じ。

自分が助かり、民が犠牲になって彼等に今のまま生きる道はない。

「……鎮めの役目は、女性だった。男の身体だけでは、鎮められないかもしれない。だが、アーリー・オサードは生かす必要がある。だから、俺に気がある彼女を——メリッサを利用することにした」

『ウソでもさ、お前がいいとか言えないの？ そーゆーの、好……きな男に言われたら、落ちる、よ？ 簡単に……』

そして『独りにしないで……』と不安げに見詰める彼女に、『嘘でも、お前は落ちるのか？ 俺の思い通りになるのか』と、レイザはメリッサを求めた。

おまえがいい、身も心も、お前の全てが欲しい、おまえだけでいい——と。

「民間人を犠牲に出来ないというのなら、婚姻届でも偽装して、彼女を俺の……貴族の妻にすればいい。メリッサには求婚されたことがある」

更に、事後処理に関しては、アシル・メイユール伯爵が全面的に協力してくれるはずだと、続けた。

「騙して利用しているだけで、好きではない、と？」

「好きな奴などいない。親しみを感じている者も、友も1人たりとも作ったことがない」

レイザは自嘲した。途端、バートがレイザの胸倉を掴み、乱暴にレイザの背を岩に打ち付けた。「お前が用意したあの薬は、飲めば体が壊れるような代物だ。五体満足で帰れないのは解っている。俺にはまだやりたいことがある。無事を祈ってくれる仲間達もいる、だが騎士としてではなく、友であるお前の力になりたいと思った、それが俺が同行を決めた理由だ」

バートは吐き捨てるように続ける。

「てめえは、共に命を賭す俺のことも友人でさえないと言うのか！？ ただ利用しているだけだ」と？」

しばらく2人はそのままにらみ合った。

「……認められるかよ。メリッサは連れて帰る」

怒りと強い意思を込めて、バートはレイザを睨み続けた。

レイザが、目を逸らした。そして……。

「悪かった」

呟くように、言った。

「お前は……俺の、唯一の友だ」

暗く苦しげな表情で、レイザは友を前に語る。

「俺の心は、アーリー・オサードより歪んでいる。

子供のころから、国や人々の平安なんて望んではいなかった。

全て崩れればいいと思っていた、崩壊してしまえば、自分は自由になれるんじゃないかと。

それを為せるだけの力があつたのなら、やっていだろう」

アーリーとレイザの違いは、アーリーには彼女を理解し、愛してくれた家族がいた。数年前まで。

レイザには、子どものころから心を許せる存在は傍にいなかった。愛する人も。

「だが、洪水が起きて、魔法学校で働くようになり……慕ってくれる生徒達を可愛いと思った。守りたいという感情が芽生えた。生徒達の未来の為に生きてもいいと」

レイザが首にかけているお守りに手を伸ばして、握りしめた。

「その感情は、今では繋ぎ止めていないと消えてしまいそうなほど脆い。俺は最後まで、彼等の先生でありたい。だから、必要なんだ。この、今の俺を好きだと抱き締めて落ち着かせてくれる人が。」

メリッサは俺の精神安定剤だ。大切に思っているし、彼女に言った言葉は嘘ではない。

彼女が、俺のためだけに生きてくれるのなら、俺には、彼女だけでいい。他には何もいらぬ。俺自身のために他の何も求めたりしない」

「……わかった」

バートは深く息をつき、レイザの襟から手を離した。
「すまなかった。俺も少しナーバスになっていたようだ。
世界のことは、お前“たち”に任せる。協力者は皆無事に帰還させる、それでいいな？」
「……お前も帰れ。俺が進む最後の道は、メリッサが開いてくれる」
バートはその言葉に頷くことは出来なかった。
「ベストを尽くそう」
そう言い、レイザの肩を叩き、レイザは「ああ」と頷いた。

「追って来ちゃった」
皆のもとに戻ろうとした2人の前に、メリッサが飛び出した。
「すみません、心配で……」
ピア・グレイアムも申し訳なさそうに、岩陰から姿を現す。
「お、お前等どこから話を聞いてた」
バートは困ったような顔で苦笑し、レイザはふて腐れたような顔を背けている。
メリッサはそんなレイザに近づいて、笑みを浮かべる。
「うん。そばにいたい。いさせて？」
温泉で、彼に告げられた時に返した返事をもう一度して。
「……よくできました」
手を伸ばして、レイザの頭を撫でる。
「それでね、ちゃんと言えてないから聞いてくれる？
私、レイザくんが好きだよ。死ぬほど好き！」
迷いのない、晴れやかな笑顔だった。
「ありがとう」
と、レイザはメリッサを抱き寄せて——
「あーえーと、ピア！」
バートは慌てて2人を隠すかのように、2人とピアの間に立った。
「深部から戻ってくるまでの間、これを君に預けておく」
見えないように首からかけていたもの……小さな石のついたネックレスを、バートはピアに渡した。
「これは……魔法具、でしょうか」
「魔力増幅装置だ。魔力を瞬間的に増幅させる装置なんだが、体に非常に負担がかかる。備えてきたとはいえ、君の身体能力で強力な術を行使したら、体が持たない可能性がある」
仲間と自分自身を護るために、どうしても必要になった時の最終手段として、持っていてほしいと、バートはピアに言った。
「俺達が深部に向かった後、入口に残るメンバーのリーダーは君だ。火山を鎮め、被害が及ばないよう俺達は最善を尽くす。君も犠牲を最低限に抑えるために、最良の選択をしてほしい」
バートはそう言って、ピアにネックレス型の魔力制御装置を預けた。
深部で何が行われるか……残るメンバーの中で、それをバート達から説明を受けたのは、ピアだけだった。
「私からも」
ピアは手作りの、パンの刺繍入りのお守りを、バートに差し出した。
「どうか、無事に……帰ってきてくださいね」
「俺は絶対帰る。やりたいことも、なしたいことも、沢山あるんだ！」
バートはピアからお守りを受け取って、強く輝く笑みを見せた。

こちらのリアクションは以下のPCに発行されています。
メリッサ・ガードナー
ピア・グレイアム